

# 行動における思考

田 中 加 夫

## 一

行動ないしは行為と呼ばれうる身体的運動には、必ずなんらかの意識のプロセスがともなうものと前提する。ただ、ここで「意識のプロセスがともなう」ということは、必ずしもそれが行動と同時に進行することだけを意味するのではない。ほとんどまったく無意識におこなわれる行動にも、それに先立って行為者が自己の内外の状況を直覚することとなり、あるいはそれをあとから自己の行為として認知することとなり、少なくとも必ずともないうるはずだということである。いかなる意味においても意識のプロセスをとみなないような身体的運動は、それゆえここに言う「行動」の範囲からは明らかに除外される。

この前提は、たんに行動の倫理的な評価や反省のために必要であるだけではなく、おそらくまた行動についての価値自由な客観的研究にとつても有意味な前提であろう。ただ、後者の立場が自然科学の観点に傾斜する場合には、意識のプロセスがむしろ意識外の生理的なプロセスに還元され、さらにはそれが生理的な行動環境における物理・化学的なプロセスに還元されるもの、と想定されるかもしれない。

このような想定を「行動」の理論から排除する必要は、まったくない。生理的なプロセスが、少なくともたとえば、

食欲や性欲などの発動として自覚されており、そのかぎり最小限度の意識のプロセスと結びつくものでさえあれば、そこから結果するすべての行為は、純粹な生理的反射とは区別されて、われわれの前提ばかりか、常識の定義にも十分にかなり意味での「行動」であると見なすことができる。しかもその際、意識のプロセスが生理的なプロセスをコントロールしているかいないか、さらに欲ばった見方をとれば、生理的なプロセスが意識のプロセスによっていわば昇華されて、直接にはもはやそれを制約する力を失っており、行為がその意味で真に自由に選ばれているかどうかということは、必ずしも「行動」の範囲を確定するために不可欠の観点であるとは考えられない。それどころか、上記の想定の本質をなす因果論的な観点は、のちに見るように、「行動における思考」のための重要なひとつの基礎として、むしろ保存されなければならないのである。

以上のことを考察の出発点とするについては、おそらくなおいくつかの疑問が提出されるであろう。たとえばまず、上に暗示されたような生理的な行為や、それに多少とも文明的な洗練ないしは粉飾を加えた意味での、日常のあるいは個人的な行為が、はたして歴史的あるいは社会的な実践と同列に「行動」として扱えるだろうか、という疑問があるかもしれない。「行動」の現象ないしは様相について、これらの両面（または三面）を区別することはもちろん可能であるし、その区別を原理的に明らかにすることは重要でもあろうが、本稿ではこの論点に立ち入ることは割愛する。

ただ、それにもかかわらず、歴史的あるいは社会的な実践を深刻に要請するような状況が、現実には（一定の集団をなすにもせよ）個人における、日常的な、あるいはむしろ生理的な行為のプロセスの障害や矛盾から生じるものであることだけは、確認しておいてもよいであろう。さらに言えば、本稿の論点にとってより重要なことであるが、かに行動の異なった様相ごとに、行為者の *an sich* な意識は自己の分裂を認知したり、使いわけたりすることがあるとしても、そうした意識のプロセスの *für sich* な形態であるべき「行動における思考」に関しては、少なくとも主体の同一性が維持されていなければならないと考える。

この想定に対しては、ただちにもうひとつの疑問が提出されるかもしれない。「行動における思考」とは、たんにそのような意識のプロセスの一形態にすぎないものだろうか。そうだとすれば結局のところ、各人がそれぞれ自分の「行動における思考」を内観しうるだけであるから、この主題についていかなる一般的なモデルを求めることもできなくなるのではなからうかと。

たしかに、「思考」一般についてなら、個々の意識のプロセスを度外視する純粹に形式的なアプローチも可能である。しかしながら、「行動」におけるその現実態を問題にする場合には、主体としての個々の自意識の内容を無視するわけにはゆかず、そのかぎりいわゆる内観の方法が、それにアプローチする唯一の方法であることは言うまでもない。したがって、右の疑問を原理的にしりぞけることは不可能であろう。なるほど、われわれは内観された自分の思考内容を表現することができるし、それをたがいに理解しあうこともできると信じてはいる。だが、この場合とくに理解とは、与えられた表現にしかるべく自己の思考内容に対応させた上で、それを改めて内観的に解釈することではない。ただ、それにもかかわらずわれわれは、この手続きを慎重にやりとりすることにおいて、通常は他人の思考内容をもほとんど不都合なしに推定しえていけると見なせることから、少なくとも自他の「行動における思考」について、一定の形式化という意味での一般化を目ざすことは可能であると考え。——本稿の目標は、さし当りその辺にあるものと了解されたい。

## 二

「行動における思考」とは、行動に必ずともなう意識のプロセスの *tatsächliche* な形態であると規定した。このことを内観的な事実に即してもう少しほり下げてみると、行動を思考することにおいてわれわれは、自分がやがておこなおうとする、あるいは現におこないつつある、それともまたすでにおこなってしまった行動について、*anschaulich* な

意識が認知するかぎりでの内外の状況のうちに、そのなんらかの理由づけないしは正当化を求めているものとわかる。もちろん、とくに過去の行動については、正当化がついに不可能であると認定せざるをえないこともまれではなからうが、そのこと自体はこの思考の破綻ではなくして、むしろひとつの積極的な成果であると思ふことができる。なぜなら、それは未来のあらたな行動を選ぶについて、たしかにその理由づけないしは正当化のために役立ちうるからである。問題は、いかなる理由づけも正当化も成功しないままに、しかもそのような行動がしばしばおこなわれていると思われることであるが、この点についてはだんだんと触れることにしよう。

自己の行動の理由づけないしは正当化を試みるに際して、その思考形式は基本的には、「目的」および「手段」というカテゴリーだけによっているものと考えてよい。つまり、自己の行動の理由は、それが一定の目的を達成しうる手段であるということに、またその正当性は、目的がそれを手段としてぜひとも必要とするものうちに、求められるだけで十分であらう。もちろん、後者については、目的それ自身の正当性が前提されていなければならないが、この点の吟味はあらゆる目的の設定に際して、当否はともかくも、必ずすでにすまされているものと考ええる。言い換えれば、その都度みずから正当と信じないようなことを、われわれはけっして自己の目的とすることができないと想定するわけであるが、「自分はそうではない」と言うひとがもしあるとすれば、彼はその手段の選択を目的の設定と混同しているのではないかと、と反問すればよいだろう。

この場合、争点はもちろん、「目的」あるいは「手段」というカテゴリーをどう定義するのかの一点にかかってくる。右の発言者は明らかに、およそ彼自身の意欲の対象となるものを、そのまま目的と見なしているのであるが、この立場の基礎は、意欲の存在を自明の前提とすることにおいて、それが実現されるとともに、その都度の行動が終るところ、(ends)という意味でのみ、「目的」を定義するところにある。目的を同時に行動への意欲そのものの始まるところ、つまりいわゆる「目的因」として問題にする観点は、この定義からはまったく脱落している。本稿の論点に結びつ

けて言えば、この見方は、「手段」と呼ばれるべきものをとくにどこにも残す必要がないから、実は「目的」を「手段」に関係づけるということとは無縁であり、そのことにおいてまた、理由づけのないは正當化としての「行動における思考」とも無縁である。これに反して、本稿の立場から「目的」と見なしうるものは、むしろまさにこの思考、つまり意識の für sich な形態においてのみ、その都度の an sich な意欲の動因として自覚される何かであり、それがふたたび別な意欲の対象として見いだされるにしても、その都度の an sich な意欲の対象は、これに対しては常に「手段」として意味づけられるべき、いわば、ただか暫定的な目標でしかないということになる。こうして、意欲の対自化がくり返されてゆくことで、「目的」と「手段」との関係が形づくる連鎖は、原理上いわゆる「究極目的」が見いだされるところまで続くであろう。

もちろん、その都度の意欲の目標を「手段」としてとらえ直し、その根底にどこまでもより高次の「目的」を求めるといふこの思考が、常に自覚的に、かつ明確におこなわれているとするわけにはゆかない。むしろ多くの場合についてわれわれは、このような思考が一回でもおこなわれる必要をさえ自覚しないままに、意欲の発動がただちに適切な行動に導いているものと認定するであろうが、この事態は通常、当の行動における「目的—手段」の連関が、自然のメカニズムなり社会の慣行なりによって、それほど確定的であるか、少なくともそのように信じて不都合がないことにもとづくのであって、必要ならばこの事実を改めて認識することにより、われわれはいつでもこうした行動を、容易にかつ確実に思考し直すことができる。逆に、行動についての思考がかなり困難なものと自覚されるケース、すなわち、自己の行動が「そもそも何のために」と疑われたり、あるいはまた、何かのために「はたして有効か」と迷ったりすることもまれではなからうが、そうした疑いや迷いが、ここに言う「目的—手段」の思考にそってのみ生じていることは明らかである。

これに対して、ある種の意欲の対象については、それをみずから何かのための「手段」として意味づけることがまっ

たく不可能であり、むしろいわゆる「自己目的」と見なすよりほかはないと主張することにおいて、この思考形式の普遍性を自覚的に拒否するような考え方もあるだろう。”そこに山があるから登る”式の、あるいは科学や芸術における、いわゆる「——至上主義」の考え方などがそれである。この種の考え方が、たしかにそれらの行動への思考そのものを放棄しているのではなく、またなかば無自覚に設定されている、より卑小な真の目的から目をそらそうとしての自己欺瞞でもないとなれば、それはやはり「目的—手段」の思考における、ひとつの特別なケースであると見なすことができる。すなわちそこではただ、「目的—手段」の連関をはてしなくたどる必要が認められていないというだけで、つまりはこうした対象が当の行為者にとっては、彼らの「究極目的」を直接に実現しうる「手段」であると考えられていてもよいのであって、そのことが実際、それほどまで確信的に彼らの意欲を動機づけているわけなのである。こうした意味での「自己目的」がもてることは、たしかに喜ばしいことには違いないが、その際しかし右の分析による吟味を怠って、それがまちがいに自己のそのような目的（——実はむしろ手段）であるかどうかを、厳密に問わないですましているとなれば、しばしばそれは「究極目的」なる出来あいの神話の無責任な受容であったり、それともただ笑うべきフェティシズムにすぎなかったりするおそれがある。上述の疑いや迷いは、このおそれを排除しうるものという意味では、むしろ積極的に評価されなければならないのである。

こうしたいくつかのケースとは逆に、「目的—手段」の思考が十分に自覚的におこなわれている場合も、もちろん決してまれではない。と言うことはしかし、まったくの無為から出発して、「自己」のなすべきことは何か、そのためには「まず何を目標にすべきか」などと考えることが、しばしばあるとするわけではない。むしろ少なからぬ場合には、当の行為者にあつてかねがねその実現をはばまれていた意欲が、しだいにより持続的な意図として結晶するということにおいて、「目的」はすでに明確に自覚されており、したがって、当面の意欲の対象となるべきものも、始めから明確に「手段」として位置づけられているであらう。とくにこの場合における行動の思考は、当然そうした意図（「目

的)を実現するために、選ぶべき「手段」は何かという点だけに集中する。これに反して、上述のすべての場合にも起りうるような、その都度の意欲の目標を「手段」としてとらえ直し、その根底により高次の「目的」を求めるといふ思考においては、言うまでもなく「目的」の設定もしくは確認ということがまず優先する。——そこで、さらに以下においては、始めにまず「手段選択の思考」について、つぎに「目的設定の思考」について、もう少し考察を進めることにしたい。

### 三

「手段選択の思考」がそもそも無意味ではないとするためには、一定の目的とそれを実現しようとして選ばれるべき手段との間に、少なくとも偶然でない連関が成立つものと考えてからかねばならない。この連関は通常まず、それ自体が客観的に実在するものであるとの想定において求められるだろうが、そのかぎりこれは古くから「因果連関」と呼ばれてきたものの以外の何ものでもありえない。それゆえ、「手段選択の思考」のために事実上ひとつの公理となっている原則は、「求められている目的を結果としてもたらしうるような原因が見つかれば、それこそが選ぶべき手段である」ということである。つまり、この思考の確実なひとつの基礎は、実ははかならぬ因果的思考によって与えられていると言ってもよい。

そこで、必要な因果連関がすでに認識されている場合には、この思考の任務は、ただそれを誤りなく適用するといふことだけにある。とくにそれが必然的な連関として、きわめてよく熟知されたものであるときには、この仕事はほとんど無自覚におこなわれるであろうが、意欲が思考をまつまでもなく、ただちに適切な行動に導くという、さきにとり上げたケースはまさにこれに当る。だが、そうしたケースとは違って、確実な因果連関の認識が利用できるにもかかわらず、あえてそれに依拠しようとしないう意味での無自覚な行動は、偶然がときにはこれに味方すること

があるにしても、遅かれ早かれ挫折するであろうことは言うまでもない。——偶然に依拠しなければ、自由な行動が不可能になると考えることは、それゆえけつして事実即してはいない。必然の認識によっても自由は可能であるばかりか、むしろそこにおいてこそ、始めて自由の確実な行使が可能となるのである。

ここで「行動の挫折」と名づけたことは、たんに一定の目的が成就しないだけではなくて、むしろそのことの絶望的な自覚が、行動への意欲の源泉としての、当の目的そのものを崩壊させるという事態を意味するのであるが、客観的かつ必然的な因果連関にできれば依拠しようとしながら、ただその認識が成功しないという場合には、ただちにこのような挫折にいたることはないであろう。適切な手段（Ⅱ原因）の発見にいたるまで、因果的思考を原理的には何度でもやり直せばよいわけであるし、必要ならそのすべての試みが確実に成功しないという認定から、当の目的がさし当っては実現不可能であるということを、この思考のいわばネガティブな結論とすることもできる。この場合には、それを当分は夢として温存するか、さもなければ、思いつかれたいくつかの手段から確実に結果しうるような別の目的に、それを改変、修正、ないしは限定すればよいであろう。ただそのことの適否に関しては、「目的設定の思考」による厳密な検討の必要が生じてくることは言うまでもない。

だが、そこにいたるまでに、現実の要求が切実であれば、「手段選択の思考」は、因果連関の意味をもう少しゆるやかにとらえ直すか（①）、それとも、まったく因果連関の認識に依拠しないでも（②）、その有効性を保持しうるようにと促されるであろう。そのことはこの思考が、①に関しては統計的ないしは確率的な思考方法に、②に関してはより純粹に論理的な、たとえばゲーム理論などに見られる思考方法にその基礎を求めることにおいて、ある程度までは実現可能であるとも言ってもよい。

「手段選択の思考」が、必然的な因果連関の認識を事実上、あるいは原理的に拒まれているような事態に対処しようとするかぎりには、そこになんらかの偶然が存在しうる余地を承認していることはたしかである。偶然の存在を認め



ることは、手段の選択に際して、いわば「かけ」の自由を許すわけではあるが、このことはただちに端的な思考の放棄を容認するものではない。そこで、「かけ」が単なる神だのみの冒険ではなく、むしろあらかじめ一定の理由と正当性を追求した上での決断でありうるためには、偶然はけつして単なる因果連関の不在のように理解されてはならない。思考はそれゆえ、既知のもろもろの偶然的連関そのものの中から、むしろできるかぎりの確からしきをもった因果連関の存在を推定し、さらにはこれにもとづいて、一定の手段（Ⅱ原因）が所期の目的（Ⅱ結果）をもたらしうるについで、期待値をまで確定しようと努めるのである。こうした思考に基礎を置くかぎり、「かけ」は一定限度までは、必然の認識にもとづく自由の確実な行使に近づくことができると言ってもよいであろう。

この思考に基礎づけられたあらたな「手段選択の思考」のための公理は、さきに確認したそれをも包含しうるより一般的な形において、まずは次のように表現してみることができらう——「求められている目的を「結果」としてもたらしうる「原因」であることが、もっとも多く期待できるような手段を選ぶべきである」（Ⅰ）と。だがしかし、このあらたな思考の特徴は、多様な偶然的連関の中に多少とも確からしいもろもろの因果連関を推定すること、つまりはひとつの因果連関の周辺に、確からしさの異なった別のさまざまな因果連関の存在を承認することにある。そこで、表現（Ⅰ）にはただちに次の制限規定が対置されなければならない——「求められている目的のほかに、求められていないばかりか、それを除くことが別の目的とされるような「結果」をもたらし恐れがあれば、そのことの「原因」となりうる手段は避けるべきである」（Ⅱ）と。実はこの制限規定が、必然的な——すなわち完全な確からしさをもった因果連関の認識を前提とする、さきの公理にとっても有意味かつ必要であることは言うまでもない。こうして、（Ⅰ）と（Ⅱ）を総合することから得られるあらたな公理の十全な表現は、「2.に言う恐れがまったくないか、少なくともそれがもっとも小さい手段の中から、1.に言う期待値のもっとも大きいものを選ぶべきである」ということになる。

このような公理から出発する「手段選択の思考」が、必ずしも単純にその有効範囲を広げないであろうことは明

らかである。現実には、しばしば2の制限規定を無視することにおいて、1の命題のみにもとづく手段の選択がいとも自由におこなわれているであろうが、そのことはもちろん、このあらたな思考の無責任な中断にはかならない。この思考があくまで原則に忠実であろうとすればするほど、それはふたたび前述のようなネガティヴな結論に導くことが少なくないであろう。しかしながら、そのことによって、この思考の方法的な基礎に含まれている、真にあらたな有効性を看過するわけにはゆかない。因果連関を必然的なそれとしてのみとらえる立場では、そのような連関があるかないかという、単なる経験的認知の問題だけが結局はすべてであるだろうが、因果連関の「確からしさ」を問うという観点は、むしろそれを未知のままに算定するという、純粹に数学的・論理的な作業をそのより本質的な側面としてしているのである。——この側面のみをいけば抽象的にもちいている思考、すなわち、まったく因果連関の認識に依拠することのない「手段選択の思考」について、最後にもう少し述べてみよう。

客観的な因果連関の認識に依拠することなしに、選ぶべき手段を求めるというのであるから、この思考のための唯一のより所は、単に一定の目的が明確に設定されているということのほかにはない。その際、当の目的がいかなる修正をも容れえないほどに一義的であり、かつまたその目的を達成するための手続きも、最終の段階から逆にたどってみるときには、かなり限定されてくるといふ条件があるならば、この思考は理論的には完全な解にいたりうるものと考えてもよい。ある特定の範囲のゲームにおいては、まさにこのような条件が満たされているから、そこにはいわゆる「ゲーム理論」が、勝ち手からの逆の推理による必着の一手の算法として成立つのである。ゲームをただちに行動と見なすわけにはゆかないだろうが、右の意味においてゲームとアナロジカルにおこなわれうるとされる行動、たとえば戦争や経営などに関しては、現に同様の理論がその都度の手段を選択するために有効であるとされている。

この種の近代的理論とは一見まったく無縁のようでありながら、実は同じく純粹に論理的な、しかもおそらく極めてよく慣用されている「手段選択の思考」がある。その典型は、「迷路」から脱出しようと試みるものが苦しまぎれ

にもちいざるをえない、ごく単純な思考であるが、ここでもまず目的はきわめて一義的に限定されている。ただし、そこにいたりうる手続きはいっさい不明であるのだから、脱出を約束する必然の道を算定するということはもちろんありえない。にもかかわらず思考はここでも、出口に達する道が、壁にゆき当る道を確認してはそれを捨てるといふ、いわばネガティヴな選択によってのみ開かれうることを、明確に論理的な必然と見なす認識にもとづいておこなわれている。――要するにいずれについても、この種の「手段選択の思考」における原則は、「論理的に必然的な手続きこそが選ぶべき手段である」ということにはかならない。

このように論理的な必然性に基礎を置く思考が、いまだにその認識論的な正当化の問題を解きえていない因果連関の必然性や、さもなければその確からしさなどにもとづく思考に比べて、思考としては一段と確実なものであることは言うまでもない。そればかりか、「迷路」に象徴されるような情報の不透明さに囲まれている状況にあっては、しばしばこれのみが頼るべき唯一の思考方法であるとさえ思われかねない。だがしかし、この種の「行動の思考」の根底には、明らかに目的(Purpose)およびそれが実現されるべき筋道を、すでに確定されたものと見なすという意味での、古い「目的観」的な決定論がひそんでいる。決定論は通常むしろ、より新しい認識への努力とともにつちかわれた、「因果観」の代名詞のように見なされていようが、たしかにそれを行動の理解のためだけにもちこむのなら、決定論に導くようにも思われる。そのことはしかし、始めから行動を行動として正当に扱ってはいないのであって、事実、行動は単に理解されるべきものとしてではなく、むしろまず選択されるべきものとしてこそわれわれの思考の関心事となる。行動の選択のために因果的思考をもちいることは、決定論とはまったく無関係であるばかりではなく、逆にこれをそこから簡単に排除することこそが、手段の可能性をたえず模索しながら、そのことの試行錯誤にに応じて、目的をまでも批判的に検討することを断念するという意味で、上述の古い決定論へとふたたび導くのである。

「手段選択の思考」の可能なタイプについては、以上によってすべてがつくされたものと考えるが、この見方に対しては、あまりにも自然科学の思考方法と、その応用としての技術の観点につきすぎているとの異論があるいはあるかもしれない。おそらくそれは、行動の環境としての自然界と、社会ないしは歴史の世界とを区別して、その間に法則の特殊性あるいは「階層性」を認めるべきだと主張する立場からのものである。

たしかにこれらの両世界を大きく区別することや、必要なら自然界をさらに細分することには、ただ単にそれぞれの世界における存在者の広義の行動が、自由、適応、反応、あるいは反作用のうちのどれだけによるものであるかを考えてみるだけでも、すでに一応の理由はある。だがしかし、それらを支配する「法則」ということで、因果連関の存在を理解するのなら、そのことの定義に関して、各世界における特殊事情を考慮する必要はまったくない。個々の世界の特殊法則が他の世界に対しては無効であるという意味で、法則の「階層性」を主張することも、より上位の能力による行動の法則が、その能力の欠如した世界には不必要であるという自明のことを確認させるだけで、逆により下位の能力による行動の法則が、同じ世界におけるより上位の能力による行動に対して、なんら影響を与えないなどとは言えないであろう。自由でさえも、いっさいの因果連関を克服できるわけではないことは明らかである。

さらにはまた、こうした重層的な因果連関の認識に関して、事実上の困難さの違いがそれぞれの世界の間にあることを別にすれば、自然および社会ないしは歴史という両世界の間に、この認識の原理的な限界を認めるについて、本質的な区別をもうける必要もまったくない。原理的な認識の限界はいずれの世界でも確認されており、しかもそれが生ぜざるをえない理由も、両世界において本質的にはなんら異なっていない。たとえば、かの「不確定性関係」という事態は、徹視的な次元での自然界において、測定のプロセスとその対象のプロセスとの間に、因果的な相互干渉が避けられないことから起るものと説明されているが、同様の事態は、社会ないしは歴史の世界においてもまったく同じ理由から、ただここでは、観察の主体と客体とがともに意識と自由の能力をそなえた存在であるがために、ほとん

ど常に、つまりより一般的に起っているだけなのである。

いったいしかし、われわれの現実の行動については、その環境としての自然界と社会ないしは歴史の世界とを区別することが、そもそも無意味であるだろう。いかなる人間の行動も、現実には両世界にいくらかずつかかわっていると言つてもよいが、本来はどの場合にも自覚されるべき自由と責任の重大さから言えば、むしろいっさいの行動が、歴史的・社会的な実践と見なせることを強調した方がよからう。その際にも常に必然の、あるいはかなりの確からしさをもった、因果連関が支配しているとの洞察は重要であるけれども、同時にまたそれを目的にいたる手段の行使として、われわれが主体的にどのように現実化しうるかについては、いかなる客観的規則もないのだということを忘れてはならない。『自然は誤らない』が、歴史には迂余曲折が不可避であると言いかえてもよい。要するに、この意味での歴史的・社会的な実践とは、自由の相互干渉と試行錯誤の中で「實在の大法則」を具現してゆくという、多かれ少なかれ創造的な行動にはかならないのである。

(未完)